

英語と私

小野 茂

私は1930年11月15日に東京で生まれた。父は鉄道省の役人で、1933年に2歳上の兄と私を京都の祖父母に預けて、母とヨーロッパに旅立った。1934年の室戸台風以外には鮮明な記憶はない。その年末、母は翌年兄が学齢に達するので、先に帰国した。その時私の口から出たのは京都言葉だったそうだ。父は1935年に帰国した。私は日中戦争が勃発した1937年に小学生になり、1941年国民学校5年生の時に太平洋戦争が始まった。その頃の日常生活には、戦争の影響はまだあまりなかった。ただ学校では言われるままの行動をしていた。

1943年、7年制の私立武蔵高等学校尋常科（4学年で現在の中学校に当たる）に入学した。初めて接した英語の教科書はThis is a book. で始まるKing's Crown Readerで、副読本はAesop's Fablesだった。外国人の先生は皆解雇されていたので、ネイティブ・スピーカーから習うことはできなかった。国語の教科書は岩波の『国語』で、志賀直哉の「焚火」のような印象的な文章が集められていた。次第に英語は排斥され、国語の授業は軍記物語中心になった。1947年父の門司鉄道局長在任中に、関門鉄道トンネルが開通した。

1943年には学徒出陣が決定し、学内での壮行会が行われた。その際の「後顧の憂いなく」という言葉が忘れられない。1944年の11月からはB29の東京空襲が始まり、防空壕に避難した。1945年の4月に、尋常科の2、3年生が軽井沢に疎開して、陸軍気象部の作業と、自給自足のための開墾を行った。1945年5月の東京大空襲で隣家まで焼けたことは知っていたが、家族と共に体験できなかったことが悔やまれた。6月には沖縄守備隊が全滅し、8月15日に敗戦が決まった。その直前体調が悪くて帰省を許され、暗闇の中を代々木西原の家に辿り着いた。

9月半ばに敗戦後の授業が始まった。一番印象に残っているのは病弱の先生が、漱石が大吐血の後に書いた『思ひ出す事など』、谷崎潤一郎の『吉野葛』を朗読しそこに出てくる『妹背山婦女庭訓』を媒介として、私たちを浄瑠璃や歌舞伎の世界に導き、プリントで『菅原伝授手習鑑』を教えて下さったことである。英語では加納秀夫先生が短篇を板書したりプリントしたりしていらっしゃったが、ワーズワスの短詩を教えて下さった。

内務省の廃止に伴って父が最後の千葉県官選知事になり、1946年から47年3月まで公舎に住んだ。東京の家は知人に貸して、高等科1年生の兄は寮に入り、私はしばらく2時間半位かかって千葉から通学した。始発駅だから坐ることはできたが、特に東京に入ってからのはじめはひどかった。しかし悪いことばかりではない。早くから数学を専攻することに決めていた兄は、教えるのが好きで、私にも数学をやらせたかったようだ。兄が寮に入ったことでそれからは逃れられた。もう一つはその年は大変食糧事情が悪く、夏休みが長かった。それだけ暇が多かったが近くに友達はいない。加納先生が戦争中洋書の入手が困難な上に、空襲で蔵書を焼かれたが、The Oxford Book of English Verseを注釈書でなく、辞書を使って読んでいたと言っておられたが、幸い家にその詩集があった。母が伯父（母の兄）から借りていたものだった。母は語学と文学が好きで、女学校卒業後津田塾に行きたかったが、親に反対されて雙葉会で英語とフランス語を習った。その時の暁星の教科書で私にフランス語を厳しく教えた。私はワーズワス、シェリー、キーツの詩を訳し始めた。同時に千葉だけでなく神田にも本を探しに出かけた。ある時、千葉の露店で『英語青年』という雑誌を見付けた。東大英文科の講義題目が出ていた。市河三喜、齋藤勇、中野好夫、佐々木達などの名

前があった。市河三喜『英文法研究』、齋藤勇『英文学史』など英語英文学関係の本を読み始めたのもこの頃である。夏休みに京都の古書店で岩波文庫の厨川文夫訳『ベーオウルフ』を買い、帰りの夜行列車で読み耽った。通学が大変なので、秋からは兄と東京の家に居候になった。1947年の4月から父は参議院議員になり、私は高等科文科甲類に進んだ。第1外国語が甲類では英語、乙類ではドイツ語だった。文学部の入試では第2外国語もあったので、ドイツ語にも力を入れた。家では市河三喜、大塚高信、中島文雄諸先生の著書を読んだり、詩を訳したりしていた。ブラッドリー (Henry Bradley) の *The Making of English* (『英語の成立』) や、イエスベルセン (Otto Jespersen) の *Growth and Structure of the English Language* (『英語の成長と構造』) を原文で読んだ。1948年7月に妹が生まれた。その年に伯父 (父の兄) が亡くなって、会社の後を継いだ長男が私に経済をやって協力することを求めたが、父は、自分も私の兄も好きなことをしていると断ってくれた。

それまで文学部は入りやすかったが、軍関係の学校や女子校からの受験生がいるからのんびりしてはだめだと言われた。試験科目は、2つの外国語と、国語、漢文のほか歴史か哲学のいずれかで、それが決まるのは1月頃ということで、両方の準備をしなければならなかった。私が受験した1950年は哲学だった。しかしこのやり方はよい事だった。旧制最後の年で、東北大が日をずらしてくれたお蔭で、東大の試験が終わると夜行で仙台に向った。東北大の試験には歴史もあった。それで東北大に合格した時には嬉しかった。

東大の英文科には中野好夫、中島文雄、平井正穂の3人の専任の先生がいらっしゃった。入学式の数日前に新宿の古書店で中島文雄先生の『英語学研究方法論』(1941)を買って早速読んだ。そこには「英語史研究は英語学の本体をなすもので、取扱ふ対象が複雑多岐に互つてゐる」と書かれていた。翌年の『英語青年』に、先生が留学中に聴講されたロンドン大学教授チェインバーズ (R. W. Chambers) の次の言葉が引用されていた。

Now, in speaking of Philology at University College, I wish to use the word in the older, broader, and

more correct sense, including the study of literature as well as the study of language. University College was the first place in England where chairs were established in the Language and Literature of England and of other modern countries; and within these walls the study of language has never been divorced from the study of literature. (R. W. Chambers, *Man's Unconquerable Mind*, Jonathan Cape, 1939)

このようなフィロロジーがいかに魅力的であっても、短期間に卒業論文を書かなければならない自分には不可能な事だった。当時英文科の学生は大部分が文学で論文を書き、語学を専攻する学生は少なかった。それも歴史的研究で、主にアメリカから入った新言語学には馴染んでいなかった。どんな話題を扱おうかと迷っていた時に、国語学の時枝誠記教授の講義で、江戸時代の国学者鈴木朧が助詞・助動詞を「心の声」と言っていることを知り、チャーサーを扱って *On the Auxiliary Verbs in Chaucer's Canterbury Tales* という論文を提出した。

1953年に卒業して4月から学習院大学の助手になった。助動詞の歴史に興味を持って、『学習院大学文学部研究年報 2』(1955)に「*The Peterborough Chronicle*における助動詞」を載せた。その年の4月に専任講師になり、年末にBritish Councilの留学試験を受けたが、不合格だった。審査員の1人だった西脇順三郎先生から、人文科学で奨学金を貰うのは難しいと言われた。助動詞の歴史を調べていた時に、mōtan (その過去形 mōste が must になる) の 'may' から 'must' への意味変化を明らかにしようとして「*Motan* の意味とその変遷」を『学習院大学文学部研究年報 3』(1956)に書いた。これを松浪有教授が読んで下さり、関西大学から出る予定の *Anglica* 英文号に載せるようにと言われた。日本語の長い論文を要約した「Some Notes on the Auxiliary **motan*」(1958)はブルンナー (Karl Brunner) の *Die englische Sprache: ihre geschichtliche Entwicklung* (『英語: その歴史的発達』) の第2版 (1962) に参考文献として挙げられていた。

1956年11月22日に中島先生の媒酌で、同僚の太田恭子と結婚した (後に2人の娘と4人の孫に恵まれた。) 1959年

に一橋大学の専任講師になった。同年4月皇太子が結婚。6月、乾亮一氏と共編の『英語慣用句小辞典』（研究社）を刊行した。翌年岸首相の時、安保反対闘争中、樺美智子死亡。私は英文学会で初の研究発表をして、“The Early Development of the Auxiliary *ought*”を一橋大学の英文誌に載せた。その頃できるだけ長い論文を書くように言われて本気で取り組み、それまで書いたものに書き足して本にまとめようという気になった。1950年代半ば頃から日本の英語学研究はアメリカ言語学の甚大な影響を受け始めて、私も一時は伝統か流行かの間に迷うこともあったが、正しいと信じていた道からそれることはなかった。

1962年1月末、当時東京都立大学の英文を主宰しておられた加納秀夫先生から招かれて助教授になった。数年は中島文雄先生編『岩波英和大辞典』の校閲に忙しかったが、研究も続けた。中島先生の還暦記念論文集には助動詞 *ought* 研究の副産物として“The Infinitive with *for to* in Middle English” (1965) を書いた。英文学会のシンポジウム「英語における Modal Auxiliaries」(1967) ではチョーサーを担当した。その時の厨川文夫先生と榊井迪夫先生の質問への答として“Chaucer’s Variants and What They Tell Us—Fluctuation in the Use of Modal Auxiliaries” (*Studies in English Literature*, English Number, 1969) と“A Statistical Study of *shall* and *will* in Chaucer’s *Canterbury Tales* (*Poetica*, 1975) を発表した。それまでに書いた論文をまとめて本にすることになったが、増補訂正に時間がかかった。1968年7月に出版社に渡す前の原稿を持って仙台に行き、東北大学で集中講義をした。1969年3月に本が出来上がり、学位請求論文として東大に提出した。

1969年8月30日、フルブライト研究員として、妻と共に羽田を発った。学園闘争とベトナム戦争の最中で、留学は1年遅れ、支給額も5ヵ月分だった。1ドルは360円で、それでも出掛けたのは、兄がペンシルヴェニア大学で数学の教授だったのと有名な比較言語学者ヘーニグズワルド (Henry M. Hoenigswald) がおられたからである。ところが決まってから兄はボルティモアのジョンズ・ホプキンス大学に移っていた。大学では印欧語比較文法の講義は丁寧でわかりやすかった。チュービンゲン大学教授で客員教授

だったティーム (Paul Thieme) はメイエ (Antoine Meillet) を信奉していた。ロージアー (James Rosier) 担当の古英語は文学で、言語学科の学生はいなかったようである。娘達を連れて来られなかったので妻は先に帰ることになり、冬休みにダブリン、ロンドン、パリに旅行した。その間に1日オックスフォードに行き、ミッチェル (Bruce Mitchell) 博士に市内を案内して貰った。古英語と英語史を教えているというのでイギリスらしく親しみが持てた。別れる時に下さった抜刷に私の論文からの引用があったのは嬉しかった。パリの空港で妻と別れ、1人でフィラデルフィアに戻った。それから生まれて初めての自炊生活が始まった。1970年の正月は兄一家と共にウィリアムズバーグ (Williamsburg) で迎えた。帰国はロサンゼルスからで、1泊してハンティントン図書館 (Huntington Library) に行き、*The Canterbury Tales* の『エルズミア写本』 (Ellesmere Manuscript) を見た。飛び始めて間もないボーイング 747 (ジャンボ) に乗って5月17日羽田に降りた。

1970年3月に市河三喜博士が亡くなったが、『英語青年』の追悼号に「再建とリアリズム」という小論を寄稿した。ヘーニグズワルドの説く言語史の一貫性とティームの主張する再建形の現実性を参考にしたものだった。1971年に東大から文学博士を取得し、都立大学では大学院兼担となり、フィロロジストを育てるようにと松浪さんに言われた。院生には後に活躍する吉野利弘^{よしひろ}、外池滋生^{とのいけしげ}、中島平三などがいた。翌年、依頼されて中世英語英文学談話会において「中英語研究における諸問題について」を発表した。そこで“identity”, “generalization”, “individual speech”という問題を取り上げ、一般的傾向を明らかにしようとする“linguistic history”に対して、一貫性に関係なく個々の事実を時代順に積み重ねる“philological history”を提案した (都立大学『人文学報』1974, 『英語史の諸問題』1984に再録)。私は今でも自分の仕事は細部に集中することだと思っている。

1974年に教授になり、英文学会で「古英語の Verbs of Knowing」という発表をした。学位論文審査の時に know はいつから使われたかと聞かれたからである。これが古英語語彙研究の始めになった。しかし大修館書店出版の英語学大系第8巻『英語史 I』(1980)の中での「第6章 統

語論」,「第9章 文体論」の2章を書き,研究社から頼まれた入門的な本として『フィロロジーへの道』(1981)を書いたりして,自分の研究は中断した。それは古英語 *cunnan* (=to know) から派生した,語彙の方言的・時代的分布の問題で,ゲッティンゲン大学のシャープラム (Hans Schabram) やミュンヘン大学のグノイス (Helmut Gneuss),ゼーボルト (Elmar Seebold) などの研究が大変役に立った。1977年に来日したケンブリッジ大学のクレモуз (Peter Clemoes) 教授に話すと,英語で書けと言われた。1980年に来日したオックスフォード大学セント・ヒルダズ (St. Hilda's) コレッジのサイサム (Celia Sisam) さんが,先に出来ていた日本語版の説明をすると,熱心に聞いて下さった。英語版は宮部教授還暦記念論文集 (1981) に載せた “The Old English Equivalents of Latin *cognoscere* and *intelligere*” (1981) である。1980年にはトロント大学から新しい古英語辞典編纂中のキャメロン (Angus Cameron) 教授が来日して,英文学会のシンポジウムにも出席していた。その時の私の発表「アルフリッチとウルフスタンの語彙」は後に *Old English Newsletter Subsidia* 14, *Old English Studies in Japan 1941-81* (ed. Tadao Kubouchi, William Schipper and Hiroshi Ogawa, 1988) に再録された。その頃書いた古英語語彙関係の主なものは,「最近のOE語彙研究」(『英文学研究』,1982),“*Understandan* as a Loan Translation, a Separable Verb and an Inseparable Verb” (松浪博士記念論文集,1984),“*Undergytan* as a ‘Winchester’ Word” (Jacek Fisiak 記念論文集,1986) などである。

1978年に父が膀胱がん手術の後,最後は肺炎で9月21日に78歳で亡くなった。1983年12月に同志社大学で開催された英語史研究専門者会議で私は「中世期英語散文の文体」という発表をした(寺澤芳雄・大泉昭夫編『英語史研究の方法』(南雲堂,1985)に収録)。1984年論文集『英語史の諸問題』出版の直前,肺カルチノイド(類がん腫)のため左肺下葉切除術を受けた。同年11月にミッチェル博士が来日し,各地で講演やセミナーを行った。1985年 Mitchell, *Old English Syntax* が刊行され,翌年 *Studies in English Literature*, *English Number* のために書評を執筆した。留学してミッチェル博士に学んだ阪大の小川浩君が文学博

士を取得して都立大学に移った。1987年には2人の娘が結婚し,名大と京大で集中講義を行い, *A Microfiche Concordance to Old English* を使って “Old English *agan*+Infinitive Revisited” (都立大学『人文学報』) を発表した。翌年の始めNHKから放映された『英語についての9章』(*The Story of English*) の日本語版の校閲をし,4月から昭和女子大学の大学院に移った。同時に小川君は東大教養学部助教授になり,2004年に本学大学院教授に就任した。その頃 *agan* (=to owe) から所有動詞へ研究が集中して,前半を寺澤芳雄教授還暦記念論文集に載せ,それまでに書いた主な論文を集めて *On Early English Syntax and Vocabulary* という英文論文集 (1989) を出版した。続いて書評や小品を集めた『英語史研究室』の校正中に高熱が続き,膿胸開窓術を受け,アスペルギルス肺炎のために,左の肺をすべて失った。幸い悪性でなかったので生き延びられた。

退院して家に戻ると, *OED* 第2版をはじめ多数の本のほか郵便物の中に,ゲッティンゲン大学教授シャープラム 記念論文集への寄稿依頼があった。所有動詞の続きを書くことにしたが,しばらく休みたかった。年末近くに来日したイェール大学のロビンソン (Fred C. Robinson) 教授に会えなかったのは残念だった。『英語史研究室』は出版され,上野精養軒の還暦祝賀会で記念論文集 *Studies in English Philology in Honour of Shigeru Ono* が贈られた。執筆者は,私の注文で,すべて私の教えた学生か歳下の知人だった。巻頭にミッチェル博士と吉野君から私についての文章を頂いた。1991年の英文学会での口頭発表に基づいた “Word Preference in Old English Verbs of Possessing” をシャープラム 記念論文集の編集者に送った。

1991年の夏妻と私は22年振りに国外に出た。羽田ではなく,成田からだった。留学もして旅なっていた当時法政大学教授の羽田陽子さんが計画を立て案内をしてくれて心強かった。旅はエディンバラから始まり,観光バスで市内のみならず,セント・アンドルーズまで行った。ロンドンではキングズ・コレッジのベイトリー (Janet Bately) とロバーツ (Jane Roberts) 両教授に会い,セント・オールバンズ (St. Albans) やカンタベリー大聖堂にも行き,聖オーガスティン教会の跡も見た。8月5日から4日間コ

チェスター (Colchester) のエセックス (Essex) 大学でモールドンの戦千年会議 (The Battle of Maldon Millennium Conference) があり、研究発表とツアーがあった。スクラッグ (Donald Scragg)、クレモウズ、グノイス、ヒル (Joyce Hill)、フランク (Roberta Frank) などに会った。当時東大教授だった久保内^{ただお}端郎君も来ていた。羽田さんと妻と私はタクシーでケンブリッジに行き、エマニュエル・コレッジに入った。そこで私の論文に言及してくれていたウィンディアット (Barry Windeatt) さんに偶然会った。翌日はページ (R. I. Page) 教授にコーパス・クリスティ・コレッジを案内して貰った後、モールドンで戦ったビュルヒトノース (Byrhtnoth) の墓があるイーリー (Ely) 大聖堂に行き、オックスフォードに向い、ミッチェル博士のお宅で夕食をご馳走になった。14 日に “Cornish Riviera” という南西部を走る列車で最西端のペンザンス (Penzance) に行き、ヘリコプターで St. Mary’s 島に飛び、ヘリポートに迎えに来た車でシーリア・サイサムさんの家に着いた。シーリアの父上ケネス・サイサム (Kenneth Sisam) 氏はトルキーン (J. R. R. Tolkien) を教えたが教授にはならなかった方で、大変厳しく、シーリア自身も同様だった。あざらしの出没する海に囲まれた島でスコーンを味わう楽しい 5 日間を過ぎてバース (Bath) に向い、グラストンベリー (Glastonbury) とウェルズ (Wells) 大聖堂を訪れてロンドンに戻って帰国した。その年の 12 月、日本中世英語文学学会で “Ambiguity in Malory’s Language with Reference to Lancelot” (*Poetica*, 1993) という発表をした。

1992 年の夏オックスフォード大学ウォダム (Wadham) コレッジにおける帝京大学の英語研修が始まった。帝京大学英文科教授だった妻は引率者となり、私も同行した。指導は主にオックスフォードの学生が担当していた。授業中私達は自由だったので、図書館や書店に出かけた。学生がバスで小旅行をする時には同行した。ブレニム宮殿 (Blenheim Palace)、ブアトン・オン・ザ・ウォーター (Bourton-on-the-Water)、ボーンマス (Bournemouth)、ウォリック城 (Warwick Castle)、ストラトフォード・アポン・エイヴォン (Stratford-upon-Avon) の Royal Shakespeare Theatre (モダンな演出の *As You Like It*)、ストーンヘンジ (Stonehenge)、ソールズベリー (Salisbury) 大聖堂を訪れ

た。ロンドンではロンドン・ブリッジやロンドン塔にも行った。私たちはキングズ・コレッジでベイトリーとロバーツ両教授に会った。ケンブリッジではクレモウズ教授に会って、ハイテーブルでランチをご馳走になり、しばらく話をした。教授はオックスフォードでアングロサクソン教授ゴデン (Malcolm Godden) に会えと仰った。ゴデンとはゆっくり話すことができ、会いたい人があったら紹介すると言ってホード (Terry Hoad) 氏とスタンリー (E. G. Stanley) 教授を挙げてくれた。学生と別行動の時は、在外研究員として滞在中の小川君の家でご馳走になったり、ミッチェル博士と Turf Tavern で話したりした。さらにベイトリー教授のすすめで、サフォーク州のウェスト・ストウ (West Stow) でアングロサクソン時代の住居の復原を見たり、ベリー・セント・エドマンズ (Bury St. Edmunds) に行ったりした。楽しくもあり、ためにもなった。同年秋ホード氏が来日し、冬にはページ教授の一行が来日して、中世英語英文学会のシンポジウムで講演をした。その折り私が 1993-94 年の会長に選出された。

1993 年の春、スタンリー教授が来日した。予定のほかに余分の講義があるからといって、拙宅にもおいでになって話して下さった。その夏オックスフォード大学ウォダム・コレッジで国際アングロサクソン学会 (International Society of Anglo-Saxonists, ISAS) の第 6 回大会が開催された。21 ヶ国から 200 人位出席し、日本人が 20 人近くもいて、発表するのは 1 人だから、私が質問するようにとミッチェル博士に言われて質問したが厳しかったとも言われた。私は名誉会員 (Honorary Member) に選ばれた。学会のコーチ・ツアーでウィンチェスター (Winchester) に行き、ギルドホールで Boydell & Brewer のレセプションがあった。翌日ウォダム・コレッジでのレセプションで、トロント大学で刊行中の *Dictionary of Old English* の編者ヒーリー (Antonette diPaolo Healey) 教授と話していた。私が依頼されて書いた *āgan* の原稿についてである。幸いミッチェル博士が居合わせて話に加わって下さった。学会最後のディナーで、ハーヴァード大学教授ドノヒュー (Daniel Donoghue) が “The Reception of Lady Godiva” という講演をした。翌日はグロスター (Gloucester) やデアハースト (Deerhurst) への小旅行があった。学会後は

学生達に同行することもあったが、前年と同じところが多く、新たなのはウィンザー（Windsor）とハンプトンコート宮殿（Hampton Court Palace）だった。吉野君の案内でトルキーンとルイス（C. S. Lewis）の家を訪れた後スタンリー教授のお宅でランチを頂いた。その年の12月中世英語英文学会で会長講演をした。『ベオウルフ』における *eadig* の意味を扱ったもので、“Was *eadig* mon [*Beowulf* 2470b] ‘Wealthy’ or ‘Blessed’ ?” と題して学会誌に載せた。エンプソン（William Empson）の *Seven Types of Ambiguity*（『曖昧の七つの型』）の影響を受けたもので、『ベオウルフ』に関してはロビンソン（Fred C. Robinson）の *Beowulf and the Appositive Style*（1985）（『「ベオウルフ」と同格的スタイル』）が参考になった。ラテン語 *beātus*（=blessed）に対応する古英語に *eadig* と *gesælig* があるが、両者の分布は異なり、『ベオウルフ』の現代語訳でも、作品の解釈によって違いがあることを論じた。

1994年ロビンソン教授の論文に対する反論“Grendel’s Not Greeting the *Gifstol* Reconsidered—with Reference to **Motan* with the Negative” (*Poetica*) を書いた。その夏もウォダム・コレッジに滞在したが、8月8日から14日までミュンヘンを中心にザルツブルクやインスブルックまで足を伸ばした。その際、ミュンヘンに滞在中の池上嘉彦教授に大変お世話になった。ミュンヘン大学ではグノイス教授とグレッチ（Mechthild Gretsch）教授に会った。グノイスからはゼーボルト教授に会うよう言われ、部屋を訪ねて長話をした。ゼーボルトはウィンチェスター語彙について、それがケント方言要素を含んでいるのではないかという意見だった。グノイスの部屋に戻るとそこにはホーフシュテッター（Walter Hofstetter）がいた。彼と私は表のビアガーデンで昼食をしたが、その際も話題がウィンチェスター語彙に及び、ホーフシュテッターはそれが意図的に地域的にも限られた語彙選択であるという私の考えに賛成した。ドイツではノイシュバンシュタイン城やニュンフェンブルク宮殿を訪ね、インスブルックではケーブルカーでアルプスに登った。先に挙げた『英語：その歴史的発達』（都立大学の同僚4人による日本語訳が『英語発達史』として大修館書店から出ている）の著者ブルンナーはこの地の大学にいたのだと思って懐かしんだ。13日の夕食にリпка

（Leonhard Lipka）教授夫妻と共に池上教授宅に招かれて、翌日夜オックスフォードに戻った。

1995年の春、*Beowulf* を読んでいた時に、*medoærn micel... þone ylde bearn æfre gefrūnon* (a great mead-hall which the sons of men ever heard of) の *æfre* (ever) を否定語を入れて *ær ne* (before not) にすれば「人々の子等が以前に聞いたことのない大きな蜜酒の広間」となっておりやすいと思い、校訂を提案した（“A Musing on *Beowulf* 70”, *Medieval English Studies Newsletter* 32, 1995）。このノートは *Klaeber’s Beowulf* 4th Edition（2008）に取り上げられている。8月にスタンフォード大学で国際アングロサクソン学会第7回大会が開催され、何人かの方にそのコピーを差し上げた。ロビンソン教授にも渡すと、‘another attack’ かといいながら読んで下さった。学会では盛んになって来たコンピュータによる研究の説明が多かった。ある日のディナーの時、隣席のグラム大学クランプ（Rosemary Cramp）教授が、グラムに来たら案内すると仰ったので、喜んで翌年を約束した。

1996年の夏は、秋に来日予定の打ち合わせのために、ゴデン教授に夕食をご馳走になった。数日後ロンドンからグラムに向い、グラム城（ユニヴァーシティ・コレッジ）のゲートハウスに入った。ガイド付きツアーで城内を見学した。翌日はクランプ教授がグラム大聖堂（そこに聖カスパー（Cuthbert）と聖ビード（Bede）の墓がある）を詳しく説明した後、コーブリッジ（Corbridge）のローマ時代の遺跡、ハドリアヌスの防壁（Hadrian Wall）、ヘクスアム大修道院（Hexham Abbey）を案内して下さい。翌日はニューカースル・アポン・タイン（Newcastle-upon-Tyne）のウィア・アンド・タイン（Wear & Tyne）ミュージアムを見るようにと言われ、次の日にはマンクウィアマス（Monkwearmouth）の聖ピーター、ジャロー（Jarrow）の聖ポールに続いて「ビードの世界」（Bede’s World）を案内して下さい。その日は大学でドイル（A. I. Doyle）博士と夕食を共にし、食後、ガイド付きツアーでは入れない所も見せて下さった。翌日からはヨーク、ハワース、ピーターバラを経て、オックスフォードに戻った。

ゴデン教授のお宅で夕食の時出されたミネラル・ウォーターの名前が「モールヴァン」（Malvern）だったので、

『農夫ピアズ』の a fair feeld の fair が ‘level’ (平らな) と訳されることがあるがどう思うかと聞くと、当時の人々には ‘beautiful’ だったろうと、答えた。Beowulf 866 行にも似たような例があって、ðær him foldwegas fægere þūhton (where the paths seemed fair to them) の fægere が「平らな」と訳されることがあるが、これは文脈によるので、語の意味と翻訳の問題である。これだけを見ると私のそれまでの研究と関係がないと思われるかも知れないが、実は初期の mōtan の場合から私の関心は続いていたようである。Fair について確かめようとオックスフォードから列車に乗りグレート・モールヴァンで降り、バスで Malvern Hills の途中まで登った。それだけでは ‘a fair field’ ということは分からなかった。その帰りにウスター (Worcester) 大聖堂に行った。その年の旅の最後にはロンドンで Cats を観た。9 月にはゴデン教授とブリッグズ (Julia Briggs) 教授が来日して、昭和女子大学を含めて、多くの講義をして下さった。

1997 年 7 月にリーズ大学の国際中世会議 (International Medieval Congress) における ‘Some Aspects of Old English Vocabulary’ と題するセッションで、都立大学出身者 3 名の司会をした。オックスフォードに寄って帰国したが、それ以後は海外旅行をしていない。

1994-95 年、1996-97 年の 2 回 (合計 22 号) に亙る『英語青年』連載をまとめた『フィロロジの愉しみ』 (南雲堂) を 1998 年に出版した。同年の『英語青年』百周年記念号に執筆した「英語学の成立」で、英文科の英語学が philology から離れて linguistics に向っている傾向を批判した。

2000 年に 70 歳の祝賀会で、返礼に論文集『フィロロジストーリー言葉・歴史・テキスト』と若い時の訳詩集 (『小野茂訳詩集ーワーズワス・シェリー・キーツ』) を差し上げた (共に南雲堂より出版)。詩集は妻のすすめによるので、妻が後書を書き、妹が装丁して挿絵を描いてくれた。

医者のおすすめで 2000 年度で昭和女子大学を退職し、「萬葉と古英詩と私」という最終講義をした。大伴旅人の僊従の「家にてもたゆたふ命。波の上に浮きてし居れば、奥所知らずも」 (巻 17, 3896) と古英詩 *The Seafarer* の始めの 26 行を挙げ、アメリカで philology と linguistics の間に

たゆたっていたことのある私に通じる所があったことから始めて、トルキーンの告別の講義から次の言葉を引用した。

The right and natural sense of Language includes Literature, just as Literature includes the study of the language of literary works....the *central* (central if not sole) business of Philology in the Oxford School is the study of the language of *literary* texts, or of those that illuminate the history of the English literary language. (Mary Salu and Robert T. Farrell (eds.), *J. R. R. Tolkien, Scholar and Storyteller*, Cornell University Press, 1979)

この半世紀余り同じことが学生および教師としての私の仕事だった。

退職後私はそれまでより広い聴衆や読者を対象として話したり書いたりすることが多くなった。「フィロロジの歴史」、「英語史研究」、「Beowulf とチョーサー」、「フィロロジと私」の 4 部 11 章から成る『フィロロジのすすめ』 (開文社, 2003) は 1 章を除いてすべて『学苑』に載せたものである。そのほか古英語からアメリカ英語までの論考を時代順に配列した『歴史の中の英語』 (南雲堂, 2008) を出版したが、そこにはドーセットの方言詩人を扱った「ウィリアム・バーンズとヴィクトリア朝のフィロロジ」とハーディ協会に依頼された「ハーディの英語」を収めた。その間、*Medieval English Language Scholarship*, ed. A. Oizumi and T. Kubouchi (Olms, 2005) に、“A Philological Life” を執筆した。

フィロロジ (ドイツ語 フィロロギー) を文献学と訳したのは上田敏だと言われる (『広辞苑』『文献学』)。この語はイギリスでは、そして日本でも、特に文学の側から蔑視される傾向がある。しかし例えば C. S. ルイスは次のように言う。

I am sometimes told that there are people who want a study of literature wholly free from philology; that is, from the love and knowledge of words....If we reject as ‘mere philology’ every attempt to restore for us his [=the old writer’s] real poem, we are

safeguarding the deceit. (*Studies in Words*, Cambridge University Press, 1960)

ブルース・ミッチェル博士は、

I study OE syntax from a desire to promote understanding of the language and so to heighten the appreciation of the literature. (“*Old English Syntax: A Review of the Reviews*”, *Neuphilologische Mitteilungen* 91, 1990)

と述べる。

フレッド C. ロビンソンは理論の流行とテキストの軽視を批判して次のように言う。

The greatest strength of Anglo-Saxon and Medieval Studies in general, I believe, is that by and large we have never lost our devotion to the text and to interpreting texts. We have not let theory estrange us from the life's blood of our enterprise, the texts and artifacts at the center of our study. Goethe (in *Studier-zimmer*) spoke for our age when he said, “Grau, teurer Freund, ist alle Theorie, / Und grün des Lebens goldner Baum” (‘All theory, dear friend, is colored grey, and green is the golden tree of life’). There is an alarming peril in the wake of post-modern abandonment of texts for theories, a peril from which I think Anglo-Saxonists should distance themselves rather than embrace with the fashionable ideologies. (Paul E. Szarmach and Joel T. Rosenthal (eds.) *The Preservation and Transmission of Anglo-Saxon Culture*, Western Michigan University, 1997)

以上のような学問が古典文献学以来の本来のフィロロジである。それは言語と文学を区別せず、言語を通して過去の文化を理解しようとする学問である。日本では英語学が English philology と呼ばれていた時以来、フィロロジは文学と区別され、英語学が English linguistics と呼ばれだすと、フィロロジは理論的でない古めかしい語学で、テキストの精読より言語理論を利用したり、コンピュータ

を駆使した研究の方が進んでいると考えられることも少なくない。確かに理論によって明晰になったり、器械によって多くの資料が簡単に得られることは否定できない。しかしその結果を利用するには個々の利用者が評価しなければならない。古典文献学はそうにして、文献の言語を研究し、その成果を伝えてきた。文献の解釈は人によって異なることがあり、同一人でも時によって変わることがある。このような研究がフィロロジであり、その対象はいわゆる文学だけではなく、歴史・法律などを含む広いものである。曖昧性も対象になるので、精読が不可欠である。本稿の始めの方で引用した R. W. チェインバーズの言葉に ‘older, broader, and more correct sense’ とあるのはこのことである。

敵性語として排斥されていた今から 70 年も前に英語が好きになり、敗戦後間もなく英詩を知って、英語英文学の研究を志した私は、一貫してこの道を辿ってきたし、これからも続けるつもりである。これができたのは、先生、古今の研究者、学生たちのお蔭である。私は本務校以外でも東大文学部 (9 年)、立教大文学部 (9 年)、東京女子大文学部 (11 年)、東京教育大文学部、聖心女子大文学部 (各 1 年) などのほか、最初に採用して下さった学習院大文学部には非常勤講師として 23 年間勤めた。それぞれの教室にいろいろな大学の熱心な学生や卒業生が出席し、食事を共にしたりして楽しんだ。そのほか東北大 (2 回)、名大 (2 回)、京大、静岡大、熊本大、山形大 (各 1 回) で集中講義をした。そういう人々が現在活躍しているのは喜ばしいことである。学問はこうにして継承されて行くのであろう。過去を振り返ってみて、新たに気付いたこともあり、大変有難い機会を与えられたことを深く感謝する。

(おの しげる 本学元教授)